

花のお江戸を歩く会

新緑の鶴見川沿いの谷戸を歩く

「網島公園～大倉山公園～師岡熊野神社」

緊急連絡⇒09085831528

《散歩道のご案内》

「網島」は、太古、鶴見川が古東京湾の入江だったころ、網島公園などが海の中の高台になっており、州の中の島、中州、湿地に浮かぶ島、津の島という意味が転じて網島に至ったと言う。江戸時代：武蔵国橋樹郡の南網島村および北網島村であり、天領（幕府直轄地）の農村でした。

1914年（大正3年）に温泉（鉱泉）が出てから昭和50年代前半までは、網島温泉と呼ばれた温泉街である。また、横浜北部随一の商業地区として発展し、一時期、桃の生産量日本一を誇った名桃「日月桃」の産地でもあった。しかし、周辺の宅地化などにより温泉施設はごく僅かしか残っていない。

今回は、お江戸を少し離れ、新緑が鮮やかな網島～大倉山の谷戸を散策します。お楽しみに。

《散歩道の順路》

東急東横線「網島駅」→網島街道→諏訪神社→長福寺（網島発祥地）→網島公園 T→桃里庵跡→網島古墳→ヒノ木の広場 T（観桜タイム）→陽林寺→網島市民の森→大北谷神社跡→飯田家住宅→市民の森梅林（小休息：観桃タイム）→東照寺→網島駅→池谷家（日月桃発祥の地）→【ランチタイム】→「網島駅」⇒東急東横線乗車⇒『大倉山駅』→大倉山記念館 T→大倉山公園 T（観桜タイム）→龍松院→大倉山エルム道→太尾神社→歓成院→大倉山駅→網島街道→いの池→師岡熊野神社（関東随一大霊験所）→のの池跡（ちの池は？）→大倉山駅（解散）

《個別ガイド》

① 諏訪神社

網島は昔、網島三郎信照の郷でした。永祿の頃には近藤五郎左衛門正次を首領とする網島十八騎といわれる武田家の家臣たちがそれぞれ領有していたとされています。網島十八騎は武田信玄と同じように信濃諏訪大社の大明神の信仰が篤かったようです。首領は信濃国諏訪明神境内の桜の一枝を馬の鞭にして馳せ参じ、ここ山上から信濃諏訪大社を遥拝し、武運の長久を祈り、もし験しがあるならば根付かせよ、と挿し木して祈願したところ、見事に根が生えたというのです。この桜の木は年を重ね大きく育ったと伝えまます。霊験あらたかな諏訪大明神は、小田原城攻め、関が原の戦で網島十八騎の活躍を

約束し見事に叶えました。慶長10年(1605)ころ、綱島十八騎によって諏訪明神を勧請したのが、綱島の諏訪神社の創建であったと伝えられます。

②長福寺(綱島発祥地)

長福治の開基は綱島十八騎頭領の近藤五郎右衛門正次といわれる。港北百話では、文禄元年(1592年)戦国時代に西国の落武者で綱島十八騎と言うものがあって、その中の一人佐々木賀典が出家し関東のこの地に長福寺を開山したとある。現在の佐々木昭典住職が十五代目にあたり世襲制である。境内に太子堂がある。佐々木賀典が西国から落ち延びた時に太子像を背負ってきたという。これが綱島が歴史に具体的に登場する最初です。

◆綱島十八騎とは? = 綱島十八騎の采地は、綱島台の辺りと思われます。采地(さいち)とは、知行地(ちぎょうち、領地)のことです。天正18年(1590年)に小田原北条氏を滅ぼした徳川家康は、江戸に入り、家臣へ知行地を与えて江戸周辺に配置しました。近藤五郎右衛門正次(こんどうごろうえもんまさつぐ)は、300石の知行地を綱島の地に拝領したといわれています。近藤正次は、綱島十八騎と呼ばれた武士たちの頭(かしら)で、文禄元年(ぶんろくがんねん、1592年)に綱島台の長福寺(ちょうふくじ)を開基(かいき)したとも伝えられています。

③ 綱島公園 T

綱島公園は、その緑濃い丘の表情が何よりの魅力だ。駅に近い住宅地の中にまるで島のように浮かぶ緑の丘は、地元の人たちにとっては貴重な憩いの場であることだろう。来訪者の立場には綱島古墳の史跡が興味を惹かれるところだ。丘上の広場には桜の木が多く、横浜市内の桜の名所としても名を連ねている。桜の咲く時期にお花見に訪れるのもお勧めだ。→桃里庵跡(茶店跡)

★綱島古墳★

横浜市の市指定史跡だそうです。径20メートル、高さ3メートルの円墳であるとあります。出土遺物から5世紀後半から末葉ではないかと記録されています。平成元年に発掘調査がなされたようで、墳頂部には木棺直葬(槨が無く直接土中に木棺を納める)で鉄刀・刀子・鉄鏃などの副葬遺物が出土したそうです。

鶴見川の河口近くで覇権を握った王の墓なのか、地元の人が古来より『ちょうしん塚』と呼ばれているそうなので、勅使、即ち王権から派遣された偉い人の墓だったかも知れないなどロマンが広がる。→ヒノ木の広場 T(小休憩タイム)→陽林寺

④ 綱島市民の森

綱島公園と尾根を連ねた山林で、市内で19番目の市民の森です。森内の植生はスギ・ヒノキの植林、クヌギ・コナラの雑木林とモウソウチクで構成されています。また、このあたりは明治末から昭和20年代にかけて桃の栽培が盛んな地であったことから、ハナモモを中心とした花木を植えています。

⑤ 大北谷神社跡

この神社跡は、慶長4年(1599)に飯田家の祖先飯田助太夫によって建てられたもので、

開墾や新田開発などを司る神様が祀られていました。周辺集落（武蔵国橘樹郡大綱村宇北谷）の人たちは、この神様を守り神として開墾や耕作に勤しんできました。春には五穀豊穡の祈願、秋には収穫に対する感謝と、それぞれ祭礼行事が昭和 25 年（1950）ごろまで行われていました。

⑥ 飯田家住宅

この長屋門がある飯田家屋敷は、綱島台の丘の北麓に接し、さらにかつては山麓以外の三方を堀で囲まれていたという、中世土豪館の屋敷構えを残す名主屋敷です。このような豪族館は鎌倉時代から戦国時代にかけて多く見られ、平時は山麓の居館で生活していても、有事の際には隣接する山上の砦に立て籠って戦をする事を想定していました。（注1）ただ残念な事に、現在まで堀が残るのは西側の一部だけですが、この堀越しに見る長屋門は、主屋と共に市の文化財に指定されたのを機に修復されて、江戸時代になっても開拓名主として当地を支配した飯田家屋敷の格式を今に伝えています。→市民の森梅林広場(小休憩タイム)

⑦ 東照寺

慶安 2 年(1649 年)に大曾根の大乗寺の三世生外意鉄大和尚によって開かれた。その頃の綱島は広い水田の中に島のように山があり、寺号を綱島山といいました。本尊は心と身体の健康を守る薬師様です。曹洞宗で本山は永平寺と総持寺で九州鹿児島島の薩摩藩主、島津公の信仰が厚く、本堂内に島津斉宣公のかかれた額があります。歴代の住職も薩摩藩の武士の出身が多くいました。江戸の商人たちの信仰も厚く、境内にその人たちの名を刻んだ石の手洗いがあります。→綱島駅

★綱島ラジウム温泉の由来★

古文書によると、綱島や対岸の大曾根では井戸を掘ると「赤水」が出ることは知られていたようである。大正 3 年に水質分析の結果、ラジウム鉱泉であることがわかり、大正 6 年最初の温泉銭湯「永明館」が開業。鉄道王・五島慶太が敷設した電鉄に「綱島温泉駅」を造り、直営の「ラジウム温泉浴場」を開場したのが、綱島温泉の始まりであった。泉質はナトリウム-炭酸水素塩泉 18℃。効用は神経痛、疲労回復、切り傷、火傷、慢性皮膚病など。湯色が濃褐色で通称黒湯と呼ばれた。

戦時中火が消えた温泉街も、1945 年太平洋戦争終結と共に、温泉街・芸者街として復活、観光や湯治目的の他に、東京の奥座敷と呼ばれ昭和 30 年代から 40 年代の最盛期には 80 軒もの温泉旅館がひしめいた。現在、綱島温泉の名残としては、綱島街道沿いにある日帰り入浴施設「綱島ラジウム温泉東京園」と銭湯「富士乃湯」があるのみである。

⑧ 池谷家(日月桃発祥の地)

池谷家の母家は、安政 4 年（1857）築造ですでに 152 年を経ている広大な建物で、江戸時代は名主の上位、”大惣代”を務められた旧家である。そこに 15 代ご当主池谷光郎氏ご夫妻が住んでおられ、邸内をくまなく案内していただいた。

綱島は、明治の中期頃から桃の生産高で岡山と並ぶ二大生産地であった。この綱島桃の

創始者は、祖父の池谷道太郎氏で、津田塾大学の創立者・津田梅子の父・津田仙の「学農舎」の紹介でアメリカから桃の苗木を取寄せ、また中国・天津からも種々苗木を輸入、試行錯誤を繰り返し、ようやく綱島の土壌と風土に最適の桃を開発し、「日月桃」と命名した。この新品種「日月桃」は、東京・横浜の地の利と味の良さで、全国にその名は広まり、近郊農家で結成された綱島果樹園芸組合は、全盛期の昭和13年には組合員91軒、桃畑面積約22町歩(22h)にも及んだ。

しかし、昭和13年6月台風による4日3晩降り続いた豪雨で、鶴見川が氾濫、桃畑は壊滅した。折からの軍国主義の台頭で穀物増産政策と相まって、綱島桃は衰退してゆき、ついに戦局の悪化と共に消滅した。→[ランチタイム]→「綱島駅」⇒東急東横線乗車⇒「大倉山駅」

⑨ 大倉山由来

大倉山は、かつては太尾村(ふとおむら)の名もない丘でした。昭和3年(1928)6月のある日、その丘の上に二人の男が立っていました。一人は東京横浜電鉄常務取締役五島慶太、もう一人は大倉洋紙店社長大倉邦彦でした。大倉邦彦は、持っていたステッキをグルッと回して、「大体このくらいの土地がほしい」と言って、五島慶太から一山(一万坪となる)の土地を買いました。二人は共に明治15年生まれの弱冠46歳でした。なんとも浮世離れた話です。当時の丘の上は、畑が広がっていて、端に村社があるだけでした。

大倉邦彦がなぜ大倉山の地を選定したのかは、記録が無くて分かりません。しかし、丘の上に立つと、西南に富士山が望まれ、東南には横浜港から東京湾が見下ろせます。かつては北方に国会議事堂も見えました。日本の象徴である富士山と、近代西洋文明の窓口である横浜港、首都東京が望める太尾の丘は、東西文明の融合を目指した大倉邦彦の理想とする場所であったと思われます。

★大倉山記念館★

ギリシャの神殿を思わせるような堂々として重厚な意匠の建物で、そもそもは実業家大倉邦彦が1932年(昭和7年)に大倉精神文化研究所の本館として建てたものという。建築史的にも貴重なものであるらしく、1991年(平成3年)に横浜市指定有形文化財(建造物)となっている。

大倉山記念館ハ、歴史的な建造物として、また長野宇平治設計の作品として、建築に携わる人、建築に興味のある人にとっては外観や内部の造りも含めて見応えのあるものだろう。建築に興味の無い立場でも、このような重厚な佇まいの建物をじっくりと見学するのは楽しい。大倉山記念館は町のシンボルにもなっており、大倉山駅前から西に延びる「大倉山エルム通り」はアテネ市のエルム通りと姉妹提携を結び、通り沿いにはギリシャ風の意匠の建物が並ぶ。これも併せて散策を楽しみたい。→大倉山公園T(休憩タイム)

⑩ 龍松院

大倉山公園の梅林となっているところは、元々はこの龍松院の地所であったらしい。龍松院は小机の雲松院の末寺だそうだ。

⑪ 太尾神社

旧太尾町は土地細長く、各地区毎に氏神を祀り、そのため村社一社、無格社一社存在し、祭典参拝その他不便の事多く、昭和 23 年 6 月 9 日無格社天満社、同八幡神社、同杉山神社、同神明社、同熊野神社を村社神明社に合併し、無格社杉山神社跡地に移転、太尾神社と社号を改め全町の鎮守とした。各神社には夫々明治 6 年 12 月村社、無格社に列し、各神社の歴史は極めて古い。→歎成院→エルム通り→大倉山駅→網島街道

⑫ いの池

師岡熊野神社の境内に「い」の池、「の」の池があります。「ち」の池は埋められて大曾根第三公園になってしまいましたが、古くはこの三つの池を合わせて「いのち」の池と呼んでいました。

⑬ 師岡熊野神社(関東随一大靈験所)

724 年、全寿仙人によって開かれたと伝わる神社。熊野山の中腹に鎮座し、「関東随一の大靈験所」とも言われている。御祭神として祀られているのは、和歌山県熊野三社の祭神と御一体「熊野権現」(伊邪那美尊・事解之男命・速玉之男命)。また、御社紋は熊野大神のお使いといわれる「三つ足鳥」で、人生の導きの神・足の守護神として、長く信仰されている。三つ足鳥は、日本サッカー協会のシンボルマークでもあるため、近年当社はサッカー神社としても親しまれ、サッカー日本代表の公式エンブレムのついた日本サッカー協会公認のお守りや絵馬が販売されている。→のの池跡→大倉山駅(解散)